

## 山水詩の出現と仏教の受容をめぐって

中西久味

本発表では、謝靈運の山水詩の背景について、彼の仏教受容の側面から考察する。その山水観（自然観）には仏教の影響が看取され、老莊玄学を前提とする従前の玄言詩のものとは性格が異なっていることを指摘しておきたい。

まず、謝靈運はおもに『般若経』（『大品』か？）『維摩経』『法華経』『泥洹経』（六卷本）の四経を介して仏教を理解していた形跡がある。これは当時の建康で主流となっていた仏教を反映しているであろう。これらの経典にもとづいた彼の仏教理解の具体的な内容は詳らかではないが、『般若経』『維摩経』で展開されている空観への関心が強く、とくに『維摩経』に親しんでいたことが知られる。彼の山水観には仏教の空観が投影されている可能性が考えられよう。

また次に、すでに指摘されているように、直接に影響を受けているのは竺道生の所説である。当面のところ、その説の根底にあると想定される「理」の概念に注目しておきたい。「理」は竺道生独特の概念と見なされ、さまざまに解釈されているが、ごく簡単に言えば、常存・幽遠などと形容される唯一絶対の仏教の真理を意味し、悟りとは「理」を体得することとされる。法身・仏性などの概念とも同一視されている。いうまでもなく、謝靈運の思想的基盤もまた依然として玄学であるため、竺道生の所説がそのまま無媒介に受容されているわけではなく、改変されている側面も考慮しなければならないのであるが、彼の山水観の形成に際しては、この「理」の概念が大きく作用していると推測される。

おおよそ以上のような観点から、山水を対象化して客観的に捉えていること、山水への凝視、「賞」の重視など、謝靈運の詩風の特徴とされている点について私見を述べておきたい。